



## 馬耳東風

「地球儀は 陽に映えながら どことなく 歪み見ゆるは われのみならんか」とかつてクランケから寄せられた句だ。3月11日、世界を揺るがす国難が勃発した。突発的な驚異に翻弄されながら、はや4ヶ月が経った。今や復興へ向けた苦難の道程にある。被災地の人々の忍耐と規律正しさは世界に感銘を与え、まさに民族的品格を示した。驚異的な規模の地殻変動が東日本を襲い想定外とされる災害を引き起こした。日本列島は地震や津波の危険にいつもさらされている。近代科学は地震や津波の予知を可能にし、電波で知らせてくれる。場所を問わない携帯電話の一斉警報にその現代的機能を再認識したものだ。大地震、追いかけて襲い掛かる巨大津波、加えて未曾有の原発事故が追い討ちをかけた。研究者は周期的な巨大津波の地層痕跡を認めるという。また、明治三陸大津波で綾里湾の遡上高38.2メートルの記録がある。さらに貞観（869）大津波から対策が検討されはじめていたともいう。悲劇は、この隙間を狙い撃ちするかのようにやってきた。プレート境界型のマグニチュード9.0の変動は、東日本の500キロに及ぶ海岸線を襲い想定外の大津波を追従させてきた。その高さは繰り返し増幅されて射流となって容赦なく人や家を呑み込んだ。宮古では標高38.9メートルの遡上高がある。大津波が驚異の牙で襲いかかり、福島第一原発が受けた高さは、14.0メートルという。核燃料はメルトダウンし、水素爆発は放

射能汚染を拡大、人々の避難を余儀なしとした。さらに野菜や原乳の出荷は制限され農民の苦悩は計り知れない。まさに国策被害と言える。地盤沈下による浸水の範囲は、海岸線を書き換えるほど航空写真や衛星画像解析で500平方キロと、東京23区の7割以上に匹敵する。被災地は伝統的な水産業の基地として、あるいは近代工業の基地として、多くの重要産業を支え、加えて関東へ多くの電力を供給してきた。今後は拠点産業の分散化が課題とされる。また、人々は世界に誇る素晴らしい景観とともに、そこに特有のさまざまな風土を育くみ生きてきた。穏やかに、時には荒ぶる神々に祈りながら自然界と共生して暮らしてきた。さらに、社会基盤を担う幾多の人材を輩出し、都市部の多くの人々の故郷がそこにあり、心の底から共鳴し郷愁を呼ぶ。一瞬にして勃発した震災がこんなにも人々の心を打ったことはあるまい。

必ず復興させる。誰しもの思いだ。政治が必死の施策を行い、国際社会が支援し、科学的調査が集積され、検証されつつある。民族の宿命的な課題との闘いである。人類に驕りがあってはなるまい。叡智を持って生きるために多重安全の備えをすることだ。現代社会は電力エネルギーを必要不可欠とする。国際社会はこの震災を厳しい教訓として、脱原発へと大きく舵取りを始めたようだ。自然力を効率化し持続可能な文明社会を目指し、「備え有れば患いなし」と再認識し、内外の熱い支援に感謝と連帯のうちに「情けは人の為ならず」と日本人として歴史に学ぶ生き方を知ったはずだ。 (柏)